

震災語り部通じ経験継承

尼崎西高放送部が映像作品「架け橋」制作

阪神・淡路大震災の経験を多くの人に伝えようと、尼崎西高校（尼崎市大島2）の放送部が、震災の語り部に密着したドキュメント映像作品「架け橋」を制作し、広げる活動をしている。部員たちは「作品を通して、より多くの人に震災について知ってもらうことが自分たちの役割」と話す。

（潮海陽香）

多数の賞「より多くの人に」

制作を始めたのは、震災30年の節目を前にした2024年夏。震災を経験していない自分たちだから伝えられることがあるとテーマを決めた。作品を通して何を伝えたいかを考え、構成や取材相手への質問を決めていった。神戸市を中心に高校生らが震災の経験を伝えている「あすパ・ユース震災語り部隊」に密着。週末や長期休みに、部員6人（当時）で取材や撮影など分担し、約1年かけて取材したという。ナレーションなどを担当した同校2年生の中川航志さん（17）は「同世代の人が強い目標を持って取り組んでいることが、とても刺激になった」と話す。

作品名の「架け橋」には、震災を経験した世代と、そうではない世代をつなぐ意味を込めた。中川さんは2歳の時、関東で東日本大震災に遭い、大きな揺れを感じた覚えがあるという。制作に携わり、「当時その場についていなくても、自分で聞いたり調べたりして伝えていくことに価値がある」と気付いた。作品は各種の放送コンテストで賞を受賞し、中川さんは「これを機に、より多くの人に震災について広められることがうれしかった」と振り返る。「記憶を風化させたくない。作品を広めることで、一人でも多くの人に震災を知ってもらいたい」と力を込めた。



阪神・淡路大震災に関するドキュメント作品で複数の賞を受けた尼崎西高の放送部員